

新約聖書の聖餐論

—コリント人への第一の手紙 11章 23—34 の釈義—

柏井 忠夫

聖餐論のテキストである第一コリント書 11章 23—34 の釈義をするのが本稿の目的である。印刷上の面倒を避けるためギリシヤ語を引用しないけれど、内容はギリシヤ語本文に従って行なった釈義である。ここに含まれているイエスの言葉は、聖餐式の制定語として用いられ、その解釈をめぐる論争と分派が生じたのであるが、この釈義ではその様な聖餐論にまで視野を拡大せず、本来の釈義の任務に従って、この本文が書かれた時に持っていた意味、この言葉が語られた時に持っていた意味を究明することに専念する。筆者が用いた註解書は Robertson and Plummer (ICC), C. T. Craig (Interpreter's Bible), Johannes Weiss (Meyer), Lietzmann (Handbuch), H. D. Wendland (NTD), などである。しかしここに述べる釈義は、それらの学者たちの記述の紹介ではなく、一貫した筆者自身の判断であり、解釈である。その意味で引用や参照を省略した。

(23) わたしは、主から受けたことを、また、あなたがたに伝えたのである。すなわち、主イエスは渡される夜、パンをとり、(24) 感謝してこれをさき、そして言われた、「これはあなたがたのための、わたしのからだである。わたしを記念するため、このように行いなさい」。

主の晩餐についてパウロが教えた事は、彼の意見や命令ではなく、イエス自身の命じた事を伝えたのだということをはっきりと明かにしている。それはパウロの教えた事の権威を明確に認識させ、従ってそれを尊重して忠実に従うようにさせるためである。コリント教会は少し後にはパウロの使徒としての権威に対して疑惑を抱くようになり、彼の伝えた教えから離れて、律法主義的な教師の教えに従うようになるのであるが、この時にはまだその傾向は現れていなかったであろう。しかし 1 章、3 章に現れているように、分派が存在していたのである。

から、「私はパウロに」というグループ以外の信者たちは、パウロの教えを充分に尊重する気持を持っていなかったと推察される。主の晩餐に関して信仰の意味が不明になり、秩序が失われていたことも、分派の存在と何らかの関連があったにちがいない。そのことは、1:13に分派に関して「キリストは、いくつにも分けられたのか」と言っていることと、10:17に主の晩餐に関して「パンが一つであるから、わたしたちは多くいても、一つの中からなのである」と言っていることとを考え合わせても、二つの問題が関連し合っていることが認められるであろう。そこでパウロは主の晩餐に関して彼の教えた事が、パウロの名と共に軽視されたり論難されたりすることを避けるために、それは彼の教えではなく、キリストから出た教えであり、彼はただそれを伝達しただけであることを明らかにするのである。

同様のことが15:3にも述べられている。パウロはそこでも福音の基本的内容を、彼自身の権威から切り離して、教会全体もしくは使徒たちすべての権威に基づくものとして、重んじさせようとしている。彼は一面ではコリント教会における分派の存在を解消させようと努力しているが、それと同時に福音の本質に関わる重要な事柄を、一刻も早く人間的紛争や論難から切り離して、正当な権威が認められるようにすることを急務と考え、分派の問題の解決を待たずに、それはそれで取りあえずはっきりさせようとしているのであろう。

「主から受けた」というのは、パウロが直接に生存中のイエスから聞いたという意味でないのは無論のこと、復活のキリストの現れに接した時に主から聞いたという意味でもないであろう。この場合の「主から」という言葉は伝承の根源がイエス自身であることを意味するのであって、パウロが実際にそれを聞いたのは、エルサレムの使徒たちからか、ダマスコあるいはアンテオケの教会においてであろう。従って「主から」というのは、その伝承が誰によって伝えられたかに拘りなく、教会全体が従わねばならぬ権威ある事柄であることを示す言葉である。

「またあなたがたに伝えたのである」。パウロが最初にコリントに行った時に伝えたという意味であろう。その時の宣教の内容について、2:2に「わたしはイエス・キリスト、しかも十字架につけられたキリスト以外のことは、あ

あなたがたの間では何も知るまいと決心した」と言っており、15：3b—5には「キリストが、聖書に書いてあるとおり、わたしたちの罪のために死んだこと、そして葬られたこと、ケバに現れ、次に、十二人に現れたことである。」と言っている。そこにはキリスト教信仰の基本的な事項が挙げられているが、ここに述べていることによれば、主の晩餐を食べることや、その由来・意義などについても、その時教えたことがわかる。パウロはいわゆる伝道者としての働きばかりでなく、教会づくりというべき仕事もしたわけである。従って彼はコリント教会に対して新たに付け加えて教えなければならぬ事柄があるとは考えておらず、既に教えた事をくりかえし述べて彼らの記憶を新たにしようとするのである。言いかえればコリント教会が現在持っている問題や混乱は、パウロから教えられたことを忘れてたり無視したりすることから生じているのであって、彼の教えを忠実に守っていさえすれば起こる筈のない問題だと言えるわけである。

「主イエスは渡される夜」 イエスが捕えられたのが夜のことであり、弟子たちと夕食を共にした後であったことがわかる。その点は福音書の記事と一致している。パウロがそれ以上どこまでくわしくイエスの生涯について知っていたか、従って彼の宣教の中で伝えたかは、知る手がかりがない。イエスが弟子たちと共にした最後の夕食が、普通の食事であったか、過越の食事であったかということも、さらにその日がいつであったかということも、この記述からは全くわからない。しいて言えば、過越の日であったと特に記していないことは、過越の祭と関係のない食事であったことを暗示しているとも受け取れるという程度である。

「パンをとり、感謝してこれをさき、」 このこと自体は何ら特殊な事ではなく、どの食事にも共通の事である。ただこの場合には次の言葉との結合によって特別の意味を帯びるものとなって来る。パウロは特に「これをさき」という行為に意味を見出していると思われる。10：16にも「わたしたちがさくパン、それはキリストのからだにあずかることではないか」と言っている。パンを食べることよりも、さくことにおいて、キリストの死にあずかる意味が象徴されると見ているようである。このことはパウロだけでなく、初代教会全般に共通の見方であった様で、使徒行伝にも「パンをさき」(2：42, 46；20：7, 11)とい

うことばが出ている。

もとより「パンを食し」という言葉も用いられており、それが主の晩餐に与ることを代表する意味で用いられている場合もあるが(11:26—28)、「杯を飲む」というのに対して「パンを食し」というのは当り前の表現であるから、それは特別に問題にはならない。しかし「杯を飲む」と言いながら、パンについては「さく」と言って、相称を破っている点から、「さく」ことに特別の意味を見出していたという推測が生れるのである。

「パンをさく」行為がどのような意味でキリストの死を記念することに関わるのであるか。パンは体を現すのだから、それをさくことは体をさくという意味で、死ぬことを現すからか。あるいは一人のキリストの死が多くの人のためであることを現すからか。あるいは又その死による罪の贖いにわれわれの方から与るのであるよりも、キリストの側で自らをわれわれに与るのであることを現すからか。いろいろに考えることが出来るが、パウロの考えていたことを適確に推定する手がかりは与えられていない。要するにパンをさくことがキリストの死を象徴すると見ていたのであろう。

「これはあなたがたのための、わたしのからだである。」「これは」というのは明らかにイエスが手に持ってさいいたパンを指している。パンがからだであると言うのはどのような意味であるか。その解釈に関していろいろの立場が分かれ、いわゆる聖餐論争が生じたのであるが、それをこの個所に持ち込んで、このイエスの言を解釈することは不必要であり又正当でない。イエスがこの言葉を口にした時は、イエスの体は現実に弟子たちの前にあったのだから、「このパンはわたしのからだである」という言葉は、そのパンが比喩的あるいは象徴的にイエスの体を代表するという意味で言われたものと考えられる。その場合パンとイエスの体との間には、形とか色とか味とかの点で両者が似かよっているという様な、固有な関係はなさそうである。ぶどう酒と血とは共に液体であり色も似ているが、パンと人間の体との間にはその様な相似性も認められない。この様に両者は本来は無関係なものであって、イエスが任意に二つを結びつけて関係を設定するのである。

「あなたがたのための」という語は、体そのものがあなたがたのものである

という意味か、それともパンがあなたがたのために私の体を現す象徴とされるという意味か、どちらにも理解できる。しかし共観福音書が杯に関するイエスの言葉を伝える際、「……のために流すわたしの血」と記している所から見れば、体についての言葉も、「あなたがたのために死に渡す」という意味に理解する方がよいと考えられる。

「わたしを記念するため、このように行いなさい。」 「このように」とはどれだけのことを指すのか。上に記されているのは、パンをとり、感謝し、さくことである。配ることや食べることは言われていない所を見ると、パンをさくことがイエスを記念する行為の主要な意味をになうものと思われる。

次に共観福音書の記事にはこの言葉が含まれていないことから、これがイエスの口から出た言葉であるか、それともパウロがイエスの意図を言葉に移したものであるかが問題になる。もしイエスがこの様に言ったのだとすれば、共観福音書がそれを伝えていない点が問題である。教会が行なっている主の晩餐とイエスの最後の夕食とを結びつける重大な意味を持つ言葉が、パウロまで伝わっているなら、共観福音書記者に伝わらない筈はないと考えられる。もし伝わっていたとすれば、それをほぶく理由はなきように思われる。従ってこれはイエスが口にした言葉でなく、イエスがパンをとり感謝してさき「これは私の体である」と言ったのが、私を記念するためこの様に行えという意味でなされたことだと、パウロが註釈を加えていると見るのが穏当である。その場合にもそれはパウロの解釈というよりも、誰の眼にも明らかなイエスの意図を言葉に移したままであって、イエスの代弁者としてその意図を伝えたものと言うべきであろう。

(25) 食事ののち、杯をも同じようにして言われた、「この杯は、わたしの血による新しい契約である。飲むたびに、わたしの記念として、このように行いなさい。」

「食事ののち」 この言葉によって、パンをさいたのが食事の始めか途中かであったことが、暗示されている。共観福音書ではルカだけが同じ事を記しているが、マタイ・マルコは何も記していない。

「杯をも同じようにして」というのは、パンの場合に記されている「とり、感謝してこれをさき」と同じという意味である。パンの場合にはさくことに重

点がおかれていると思われるが、杯の場合にはそれに相当する行為が記されていない。マタイとマルコは「与えた」ことを記している。

「この杯は、わたしの血による新しい契約である」。杯が新しい契約であるというのは、パンの場合と同じく、イエスが任意にこの二つのものを結びつけて、比喩あるいは象徴として用いるのであって、本来は両者の間に特別な関係・連関は認められない。

日本人の考え方の中では、杯は人と人との関係を結ぶ盟約を意味する場合がある。結婚、同志の結団、親分子分の関係の成立などに、杯が重要な意味を持つと考えられて来た。しかしユダヤ人の社会には杯が契約を意味するという考え方はなさそうである。従ってここで杯が契約を現すのは、パンがイエスの体を現すのと同様に、イエスがその場にあるものを任意に用いてこの様な意味になわせたと見てよいであろう。

「契約」はヤーウエとイスラエルとの契約を意味する。「新しい契約」という思想は、エレミヤ書 31章に現れているが、イエスがエレミヤの思想を念頭においてこの言葉を述べたかどうかわからない。福音書の中のイエスの教えには、律法を成就するという考え方は見られるが、新しい契約を立てるという考えは見られない。しかしここではアブラハム以来の契約関係が新しい契約に切り替えられるという意味である。この言葉乃至は思想が新約聖書の中で発展させられて、律法に代る新しい体制として福音という原理が確立されるのである。

ここで解釈上問題になるのは「わたしの血による」という言葉である。これが「新しい契約」を修飾するものであるか、あるいは「ある」という動詞に説明として付け加えられたものであるかが問題である。なぜそのことが問題になるかと言えば、ギリシヤ語の原文の「である」という語が、主語と客語の間になく、丁度日本文の場合の様に、客語の後に来ており、その後に「私の血による」という句が付け加えられた形になっているからである。従って文章の配列から見れば、「この杯は、私の血によって、新しい契約である」と訳するのが妥当だと言える。その場合にこの言葉の意味は、この杯が新しい契約を現すものとなるのは、それに入っているぶどう酒が私の血を現すからである、ということになる。即ち「この杯は」という語は杯の内容であるぶどう酒を指すのであ

り、そのぶどう酒はまたイエスの血を象徴するものと考えられているのである。

この様に「である」という語の位置に重きをおいて読むことをせず、内容の上から解釈すれば、「私の血による」という句を「新しい契約」の説明と理解する方が自然な解釈だと思われる。口語訳はこの解釈をとっている。この場合は血が契約の成立に果たす役割が表面に出て、杯と血とのつながりは二次的になっている。新しい契約がイエスの血によるものであるということは、イエスの死の贖罪的意義が理解されて初めて受け容れられることであって、果してイエスの生存中に説明なしで通用することであったかどうか疑問である。しかしそれはこの言葉に限ったことでなく、イエスの言葉の多くは生前の弟子たちにとって謎であったと思われる。しかし復活の出来事によって「彼らの目が開けて」その真意を明らかに理解できる様になるのである。

(26) だから、あなたがたは、このパンを食し、この杯を飲むごとに、それによって、主がこられる時に至るまで、主の死を告げ知らせるのである。

「だから」という語が示す様に、この言葉はパウロがイエスの言葉に加える解釈である。「このパン」「この杯」といって、特定のパン、特定の杯を指している。一般的に、パンを食べぶどう酒を飲む機会があるたびごとにいうのではなく、イエスが言われたことに従って、イエスの体を現すものとして食べるパン、イエスの血を現し従って新しい契約を象徴するものとして飲む杯という意味である。パウロの時代には主の晩餐は普通の食事から独立した儀式になってはいなかったと思われるが、しかし食事の中では特別に区別された行為として、主を記念するパン、主を記念する杯が、感謝して分けられたのであろう。物質としては食卓に供されるパン・ぶどう酒であったが、それをを用いる信者たちの意図によって、特定のパン、特定の杯として、他のものと区別が生ずるわけである。10:21に「主の杯と悪霊どもの杯」と言われるのも同様な意味からである。

「主の死を告げ知らせるのである」。「告げ知らせる」というのは言葉をもって語ることを意味するが、この場合はもっと広い意味で用いられていると理解すべきである。即ちイエスの言葉に従ってパンをさき杯を飲むことによって、主の死の持つ意味を明らかに示すことを、「告げ知らす」と言うのである。主

の晩餐は、それに与る者がイエスを想い起こす（記念する）だけに止まらず、イエスの死が多くの人々の罪の贖いであり、それによって神と人との新しい関係が打ち立てられたことを、他の人々に向けて現わし示す意味を持つのである。

「主の死を告げ知らす」というのは、単にそういう事実があったことを知らせるという意味ではない。その死の意味、特にその死が自分たちとどの様な関わりを持つ出来事であるかを宣べ伝えるという意味である。言いかえれば主の晩餐を守ることによって、自分たちがキリストの死とどの様な関わりを持つ者であるかを明らかに示すのである。イエスと生活を共にした弟子たちが、イエスの死後その師を想い起こす私的な記念の方法として主の晩餐を行ったに止まらず、生前イエスに接したことの無い者も含めて、教会全体が行う公式の行事として主の晩餐が行われる様になったのは、ここに言う様な意味において主の晩餐が取り上げられたからである。教会がキリストに対して負っている信仰告白と宣教との使命を実現する一つの道として、主のパンを食し主の杯を飲むことが行われねばならなかったのである。

「主がこられる時に至るまで」キリストの死からキリストの再臨までの間の時期が、主の晩餐によって主の死を告げ知らせべき期間である。主が来られればもはやパンと杯とによって主を想い起こすことは不必要になる。その時には顔と顔を合わせて見ることが出来るからである。主の晩餐の終末論的性格あるいはその時間的限界がこの言葉によって示されている。それは又教会と信仰との限界であると言ってよいであろう。

主の晩餐は単に過去の出来事あるいは人物の想起という後向きの意味で行われたのではなく、それと共に主の来られることを待ち望む前向きの姿勢で行われたのである。そのことは「新しい契約」ということばによっても示されている。新しい契約とはイエスの死によって神と人との関係が新しくされることを意味するのであって、当然その新しい関係が実現されるのを待ち望むことを暗示している。

(27) だから、ふさわしくないままでパンを食し主の杯を飲む者は、主のからだ
と血とを犯すのである。

「だから」というのは、そのパンと杯とが普通の食事の一部ではなく、主

のからだと血とを現す特定のパンであり杯であるからという意味である。従ってそれを正しく受けないで誤り用いるならば、それは主の体と血とに対して誤りを犯すことになると言うのである。

「ふさわしくないままで」とは具体的にはどのようなことを指して言うのか、ここには何も説明されていない。ただ20—22および33—34を見るとコリント教会における誤りがどのようなものであったかは大体推察できる。即ちコリント教会では皆がそろってから食事を始めるのでなく、多分仕事のために遅く来る貧しい人々を待たずに、各自が勝手に自分の食事をするという風だったために、一方には食事のまだの人があるかと思うと、他方には食べ酔っている人があるという有様であった。従ってその食事の中で主のパンをさいて食べ主の杯を廻して飲むことが出来ない実状であったと思われる。これが「ふさわしくないままでパンを食し主の杯を飲む」と言われているのだとすれば、「ふさわしくない」というのは、直接には各自が勝手に食べ飲むという無秩序なやり方を指すことになり、従ってそれを是正するための具体的指示として「互に待ち合わせなさい」と言っていることになる。しかしどうもそのことだけが問題なのではなく、さらに一般的・根本的に、イエスの言われたことが正しく受けつがれず、正しい心構えなしに、単なる飲み食いになることが戒められていると考えられる。

「主のからだと血とを犯す」とは主の体と血とは対して罪を犯すという意味である。パンと杯とを正当に取扱わないことは、それらが象徴する実体である主の体と血そのものを不当に取扱うのと同様な罪であるというのである。単なるパンであり杯であると考えて軽率に一般の食事と混同してはいけぬ。主を記念するパンと杯とには、主自身が関わっているのだから、キリスト自身に対する尊敬と信仰とをもって扱わなければいけないと言うのである。

ここで日本語の訳には現れていない解釈上の問題がある。それは原文では「パンを食し」と「主の杯を飲む」との間に「あるいは」という接続詞が入っている点である。当たり前ならば「パンを食し、そして主の杯を飲む」と言う管の所を「パンを食しあるいは主の杯を飲む」と言っていることが問題になる。この「あるいは」を「そして」と同じ意味に理解することも出来る。多くの註

解者がその解釈を採っており、日本語の口語訳もその立場をとっている。しかしパウロが殊更に意識して「あるいは」という語を用いたことも考えられるので、その場合のことも考えて見る必要がある。その場合「ふさわしくないままパンを食しあるいは主の杯を飲む」というのは、パンと杯と両方を誤り用いないでも、その何れか一方でも誤り用いるならば、という意味になる。今日の聖餐式では起り得ないことであるが、当時の様に主のパンを食事の始め或いは途中で食べ、主の杯を食事の後で飲むという様な場合には、その一方に誤りだけで不当な取り扱いがなされるということも起り得るであろう。その様な場合、どちらかと言えば杯の方に誤りが犯されることが多い様に思われる。パンをむやみに食べるおそれはなさそうだが、ぶどう酒を酔うほどガブガブ飲むおそれがあり、あるいはそれまでに既に酔ってしまって主の杯を正しく受けられないということも起りそうである。その様にして何れか一方だけでも誤った態度で受けるならば、それはキリストの体と血とに対して罪を犯すことになるのである。「あるいは」という語に特別の意味を認める場合、この様に解釈することが出来るが、「そして」と同じ意味に理解するのと根本的にちがうという程のことでもない。

さらにこの「あるいは」という語に注目して、それは当時の教会でパンか杯か一方だけをもって主の晩餐を守ることが行われていたことを物語るのであろうと解釈する学者もある。たしかにその様に解釈することも可能であり、それを否定する特別の材料もないが、ただこの接続詞一つだけに基づいてそこまで推論することは妥当とは思われない。

(28) だれでもまず自分を吟味し、それからパンを食べ杯を飲むべきである。

上に述べた様な主の体と血とを犯すことが起こらない様にするには、主のパンを食べ杯を飲むのに先き立って、自分がふさわしい状態にあるかどうかを反省せよと命ずるのである。その結果ふさわしいと判断したらパンと杯とを受けよという意味であるが、もしふさわしくないと認めた場合はそれをふさわしい状態に改めた上で受けよという意味も含まれていると見てよいであろう。

次に「自分を吟味し」と言うのは、各人が自分のことを反省することを命じ

ているのであって、互いに他人を批判すること、あるいは或る特定の人が他の人々を批判・審査することは意味していない。主の晩餐に与るにふさわしいか否かは、どこまでも各人の信仰的な反省にゆだねるべき事柄であって、教会が審査し判断すべき事柄ではないというのである。

(29) 主のからだをわきまえないで飲み食いする者は、その飲み食いによって自分にさばきを招くからである。(30) あなたがたの中に、弱者や病人が大ぜいおり、また眠った者も少なくないのは、そのためである。

主のパンと杯とを普通の食事の様に飲み食いすることは、それらが象徴するキリストの体と血とに対して罪を犯すことになるのであるから、それらが象徴する主の体を正しく認識して食べたり飲んだりしなければならない。そうしないと神のさばきを受けねばならなくなる。「その飲み食いによって自分にさばきを招く」と訳されている原文は、直訳すれば「自分にさばきを飲み食いする」と書いてある。その意味は訳文の通りであるが、原文の言い廻しには飲み食いする行為が神のさばきに直結することを示す様な感じがある。主の晩餐は正当に行われるならば、それに与る者にキリストの十字架の死を現して、信仰を強める効果を持つはずである。しかし正しく行われなくて、普通の飲み食いと変らない様になる場合には、信仰の益にならないだけに止まらず、かえって神のさばきを招く原因になってしまうのである。

30節はコリント教会が現に神からさばきを受けている事実を指摘する。「弱い者」というのは「病人」という語と同じく、健康上の障害を意味する語であるが、パウロがこの二つの語をどういう区別をして使っているか明らかではない。むしろ二つを組にして使うことによって、病弱な人を広く含めたと見てよいであろう。「眠った者」というのは「眠っている者」と訳す方がよい。現在この世にいないことを不幸な事と見ているのである。この様にパウロはコリントの教会員の中に病人が多いこと、さらに死んでしまった人の多いことを、神のさばきの現れと見ているが、この考え方は彼の神学的な思想というよりも、むしろ当時の人々の極めて通俗的な考え方をそのまま用いているに過ぎないと思われる。即ち健康を神の祝福と考え、病弱を不幸と考えるのは、自然の人情であり、病気が治らずに死んでしまえば一層大きな不幸と考えるのも当然前で

あろう。そういう通俗的な考え方に従って神のさばきの現れと見ているのは、今日の我々から言えば物足りない感じを禁じ得ないけれど、パウロといえどもやはり時代の子である以上避けられない制約であろう。ただし「死んでいる者」のことを言うのには、もっとキリスト教的な深い意味も加わっていると思われる。それはパウロたちは自分たちの生きている間に神の国が実現するものと信じていた様である（テサロニケ第一 4：15, 17；コリント第一 15：52；コリント第二 5：4）。従って神の国の実現が間近い今、その時を待たずに死んで行く人々は気の毒だと思ふわけである。その点はキリスト者独特の考え方であったと言える。

(31) しかし、自分をよくわきまえておかなければ、わたしたちはさばかれることはないであろう。(32) しかし、さばかれるとすれば、それは、この世と共に罪に定められないために、主の懲らしめを受けることなのである。

上に述べた「さばき」が永遠のほろびに定める終末の審判のことでなく、一時的な懲らしめを意味することを明らかにしている。キリストを信じているコリント人が受ける不幸は、神の罰であるよりも、反省をうながすための懲らしめに他ならない。それによって自分たちのあやまちを反省して立ち直るならば、不信仰な人々と共に永遠のほろびに定められることを免れるのである。ここで「この世」というのは、教会の内にいる「わたしたち」即ちキリスト者と区別して、神を信じない人々を指している。

(33) それだから、兄弟たちよ。食事のために集まる時には、互に待ち合わせなさい。(34) もし空腹であったら、さばきを受けに集まることにならないため、家で食べるがよい。そのほかの事は、わたしが行った時に、定めることにしよう。

22節までに述べたことに対する実際的な改善の方法を指示する言葉である。21節に指摘した実状を改善して、主の晩餐を全員で正しく行うことが出来るようにする道は、きわめて簡単である。早く来た者が勝手に自分たちだけで食事を始めないで、待ち合わせて皆がそろってから始めるようにせよと言うのである。知識を誇っているコリント人が、どうしてこれ位のことがわからなかったのであろう。まるで子供に言う様なことを言わねばならないのは、パウロとしても情ない気持がしたであろう。3：1—2に述べたことは、この点について

も言えるわけである。

さらに付け加えて、待ち合わせが出来ない程空腹であれば、家で食事をして底を入れて来ればよいと言っている。まさに幼な子に言って聞かすかっこうである。パウロの忍耐と愛情とがうかがわれる。

「そのほかの事」というのは、主の晩餐に関して今述べた以外の点を指すのか、もっと広く、この手紙で取り上げた事柄以外の事を指すのか、明らかでない。ただこの後になお復活の信仰と聖徒たちへの献金とについて述べている点から考えれば、「そのほかの事」というのは、直接ここに取り上げた主の晩餐に関して、この他にも指示すべき事があれば、それは後日コリントに行った時に話そうという意味と思われる。